

広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる 英語授業の実践（その4）

榎 田 一 路
前 田 啓 朗
磯 田 貴 道
田 頭 憲 二

広島大学外国語教育研究センター

本稿は、2005年度より実施している広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践について、2008年度の実践と実践を報告するものである。本プロジェクトの概要と英語授業との関連については、参考文献に挙げた現在までの報告を参照されたい。

1 具体的な実践内容

まず、2008年度の実践的な取り組みを見ていく。以下、昨年度の実践内容を踏襲したものと、昨年度の実績を踏まえた本年度の新たな取り組みに分け、それぞれについて報告する。

1.1. 昨年度の実践内容を踏襲したもの

昨年度までの取り組みのうち、以下の内容については一定の成果が見られたので、本年度も継続して実施を行うこととした。

独自のクラス編成と教授内容の共通化

本取り組みの対象科目は、1年次前期開講の「コミュニケーションⅠB（リーディング中心）」と、同後期開講の「コミュニケーションⅡB（リスニング中心）」である。これらの科目につき、経済学部生約150名については、他の学部と混在させず、3レベルから成る習熟度別クラス編成を行った。また同時に、各レベルとも年間を通じて同一教員が担当することとした。さらに、共通の教科書を使用し、年間シラバスをクラス間で共通化した。これにより、後期にクラスが変更した学生にも同一内容の授業を行えるようになった上、夏季休暇期間を含めた年間を通しての学習デザインが可能となった。

教員間の定期的な情報交換

過去2年間の実践を通じて、担当教員はチームワークのもと、取り組みに必要なノウハウを高いレベルで共有できるようになった。本年度も必要に応じて定期的なミーティングを行い、共通認識の確認と意見交換を行った。

単語テストおよび小テストの実施

日々の学習を習慣づけるため、毎回の授業開始時に単語テストを行うと同時に、授業内容についての小テストを毎月実施した。これに伴い、前期末および後期末に実施されるテストが全体の成績評価に占める比重を軽減させた。

「英語実力診断テスト」の実施

前期・後期のそれぞれ第1週および最終週の授業で、「英語実力診断テスト」を実施した。これはそれぞれの学期に学習する単語を試験範囲とするもので、最終週のテスト実施後に自己採点をさせ、第1週のスコアとの比較を行うことで、学生に学習の成果を実感させ、達成感と学習意欲を喚起すると同時に、後述する WBT 教材を含む反復的な単語学習の効果を検討するためのものである。

TOEIC を成績評価の一部に組み入れ

5月・11月の TOEIC(R) 全学一斉実施に加え、経済学部昼間主コース1年生を対象とした TOEIC IP テストを前期・後期1回ずつ(7月・1月)実施し、これらの結果を授業の成績評価の一部として組み入れた。また、その際、各学期に2度ずつ TOEIC 受験機会があるので、高い方のスコアを評価の対象とした。授業の成績評価に外部試験を組み合わせる試みについては、榎田、前田、磯田、田頭(2008)でその根拠を説明したように、同一科目における評価の偏りの調整、および学習者自身の動機づけを目的としている。

「オンライン単語学習」をはじめとするオリジナル WBT 教材の使用

単語テストを行うにあたり、毎回の授業で学習すべき単語リストを作成し、初回の授業で配布すると同時に、それらの単語をパソコンで学習できる WBT 教材「オンライン単語学習」を作成した。システムは、本学の教養教育科目「マルチメディア英語演習」でも使われている「VP システム」を引き続き使用した(図1)。これは単語の綴り・発音・意味を、目と耳と手を用いながら学習するもので、1チャプター100語を10語ずつのユニットに分け、単語学習と復習テストを行った後、さらに同じ100語をシャッフルして20語ずつに分けた同様の学習を5ユニット行う。最後に確認テストを行い、8割以上正解すれば、そのチャプターは合格となる。

一方で、WBT 教材作成システム「YASUDA SYSTEM」の「KD システム」「サッと選択!」「サッと英作!」を引き続き使用し、教科書に準拠したディクテーション、文法、和文英訳の教材を作成した。

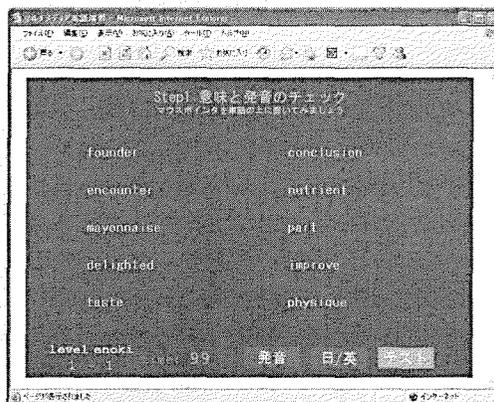


図1 オンライン単語学習 (VP システム)

1.2. 本年度の改善点と新たに付加した取り組み

本年度は、さらに以下のような点を改善あるいは新たに付加した。

新シラバスへの対応と TOEIC の利用

2008年度より、広島大学では教養教育の英語科目にいわゆる観点別評価が導入され、シラバスおよび評価規準・基準が一新されたので、本授業もそれらに即した授業内容と評価方法を採用することとした。観点別評価においては、授業活動や課題への取り組み状況、テスト等のさまざまな評価資料を収集し、それぞれの観点に応じて資料を適切に用いながら評価を行う必要がある。限られた授業時間の中で適正かつ効率的な評価を行うために、TOEIC テストで測れる部分について、そのスコアを評価資料として用いることは十分に妥当性があると考え、これまで実施してきた TOEIC の成績評価への組み入れを継続することとした。

前期教科書の通年化

本年度は一冊の教科書を通年で扱うこととした。2007年度は前期に TOEIC 対策の総合教材、後期はビジネスに関する内容の読み物を教科書として採用し、半期ごとに異なる教科書を用いることで、授業を単なる TOEIC 対策に終わらせないと同時に、経済学部生のニーズに応えようと考えた。しかし、いずれの教科書も半期で終わらせるには分量が多いため、結果的に消化不良となってしまう。加えて、本来リスニング中心の科目である後期の「コミュニケーションⅡB」で、リスニングの訓練に時間を割くことが難しくなった。これらの反省から、本年度は教科書を一冊に絞り、進度調整用の週を設けて時間的な余裕を確保した。

用いた教科書は、昨年度前期にも使用した *Power-Up Practice for the TOEIC Test: Living and Working in North America* (英宝社) を採用した。同書を採用した理由は、本授業の担当者が共著者として執筆に参加しているため、レベルと内容が学生の実情に見合っていること、デジタルデータを利用したテストや補助教材の作成等においても権利上問題がなく使い勝手がよいこと、さらに昨年度までの使用実績から TOEIC スコアや授業評価アンケート等で良好な結果が表れていることなどによる。

WBT 教材の積極的な活用

本年度も学習量確保のため、自学自習用 WBT 教材を積極的に活用することとした。前述の「オンライン単語学習」等のオリジナル教材に加え、リスニングの集中的訓練のため、WBT 教材として本学においても使用実績(前田, 2008)のある「ぎゅっと e」(北辰映電株式会社)の「リスニング800問」を利用した(図2)。「ぎゅっと e」は短期集中で大量の問題に取り組むことにより、大学の英語教育において問題とされてきた学習量の絶対的不足の解消を図ろうとするもので、これまで多くの大学で利用され、数多くの成果が報告されている。学習期間は標準では8週間となっているが、本取り組みにおいては、後期開講科目「コミュニケーションⅡB」の自学自習用教材として、後期の約4ヶ月間利用できるように設定を依頼した。学生には、毎回の授業で指示された範囲を課題として消化し、小テスト時には試験範囲として復習を行うよう求めた。また、冬季休業中に全800問中の400問の学習を課し、補講の一部に充てた。このように後期全体にわたる「ぎゅっと e」での自学自習により、夏休みを挟んで英語力が低下する傾向にある学生に対し、年間を通じた学習の持続を促す目的もある。

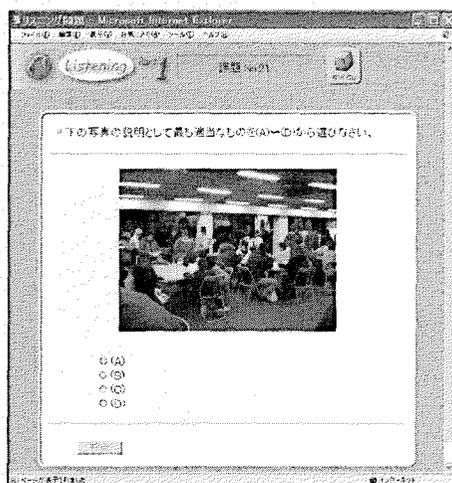


図2 ギゅっとe

「平成20年度 外国語教育実践研究報告会」での成果報告

本年度から始まった標記の報告会で、これまで4年間にわたる本取り組みの経緯と成果について発表を行った。これまでも紀要や各種学会で発表を行ってきたが、学内における成果報告を今後も積極的に行い、全学的な立場からの意見交換を行うことで、本取り組みのさらなる充実が望まれる。

1.3. 授業の進め方

具体的な授業の進め方は、以下の通りである(表1)。

2. 授業実践の効果検証

2.1. TOEIC IPの結果

この実践の効果について検証するために、TOEIC IPスコアの変化を分析した結果を報告する。広島大学では1年次の5月と11月にTOEIC IPを受験する。それと併せて本取り組みでは、前期末の7月、後期末の1月にもTOEIC IPを実施しており、合計4回分のTOEIC IPのデータを得た。この4回の平均値の変化を分析することとした。

分析に当たっては、統計的検定を行うために、4回の実施すべてに出席している者を対象とした。また、データを歪める恐れがあるため、7月と1月の実施の際に真面目には受験しなかったと自己申告した者を除外した。その結果、95名を分析対象とした。

表2は、各回における、TOEIC IPの全体スコア、リスニングセクションのスコア、リーディングセクションのスコアの平均値と標準偏差を示したものである。

平均値の変動を見ると、全体スコアとリスニングで、徐々に点数が上がっている傾向がみられる。7月から11月にかけてはあまり変化していないが、そのほかの回では、点数が上昇していることがうかがえる。ただしリーディングにおいてはさほど変化がない。

このデータに対し、有意水準を5%にして、反復測定分散分析を実施した。その結果いずれも差は有意であった(全体 $F(3,94) = 16.70, p = .00$; リスニング $F(3,94) = 29.76, p = .00$; リーディ

表1 2008年度「コミュニケーションⅠB」「コミュニケーションⅡB」の進め方

「コミュニケーションⅠB」(前期)	
1.	(4/14) 授業概要の説明；英語実力診断テスト
2.	(4/21) 単語テスト；教科書 Unit 1
3.	(4/28) 単語テスト；教科書 Unit 2
4.	(5/12) 単語テスト；教科書 Unit 3
5.	(5/19) 小テスト (4/21-5/12までの単語と教科書の内容)；TOEIC リスニング演習
6.	(5/26) 単語テスト；教科書 Unit 4
7.	(6/2) 単語テスト；教科書 Unit 5
8.	(6/9) 単語テスト；教科書 Unit 6
9.	(6/16) 小テスト (5/26-6/9までの単語と教科書の内容)；TOEIC リスニング演習
10.	(6/23) 単語テスト；教科書 Unit 7
11.	(6/30) 単語テスト；教科書 Unit 9
12.	(7/7) まとめ (教科書のやり残しなど)
13.	(7/14) 英語実力診断テスト；授業アンケート
14.	(7/19) 12:50-16:05 (5-8時限) TOEIC IP テスト
15.	(テスト期間中) 小テスト (6/23-7/7までの単語と教科書の内容)
「コミュニケーションⅡB」(後期)	
16.	(10/6) 授業概要の説明；前期単語復習テスト
17.	(10/20) 単語テスト；教科書 Unit 10；「ぎゅっと e」 001-060
18.	(10/27) 単語テスト；教科書 Unit 11；「ぎゅっと e」 061-120
19.	(11/10) 単語テスト；教科書 Unit 12；「ぎゅっと e」 121-200
20.	(11/17) 小テスト (10/20-11/10までの単語と教科書の内容, 「ぎゅっと e」 001-200)
21.	(12/1) 単語テスト；教科書 Unit 13；「ぎゅっと e」 201-260
22.	(12/8) 単語テスト；教科書 Unit 14；「ぎゅっと e」 261-320
23.	(12/15) 単語テスト；教科書 Unit 15；「ぎゅっと e」 321-400
24.	(12/22) 小テスト (12/1-12/15までの単語と教科書の内容, 「ぎゅっと e」 201-400)
(冬休みの宿題) 「ぎゅっと e」 401-800 (補講2回分)	
25.	(1/19) まとめ (教科書, 「ぎゅっと e」のやり残しなど)
26.	(1/24) 12:50-16:05 (5-8時限, 補講2回分) TOEIC IP テスト
27.	(1/26) 英語実力診断テスト；授業アンケート
28.	(テスト期間中) 小テスト (「ぎゅっと e」 401-800)

表2 TOEICIP スコアの推移

		5月	7月	11月	1月
全 体	平 均	460.21	488.42	479.42	510.05
	標準偏差	95.81	98.42	118.24	107.06
リスニング	平 均	235.47	251.05	253.16	278.05
	標準偏差	48.50	55.75	60.23	59.23
リーディング	平 均	224.74	237.37	226.26	232.00
	標準偏差	60.60	54.22	67.05	62.92

ング $F(3,94) = 2.90, p = .04$)。続いて、有意水準を5%にしてテューキーの方法を用いて多重比較を行った。その結果、全体スコアでは、7月と11月の間では差は有意ではなかったが、その他はすべて有意であった。リスニングも同様の結果で、7月と11月の間では差は有意ではなかったが、その他はすべて有意であった。リーディングにおいては、5月と7月の間では有意であったが、その他はすべて有意ではなかった。

全体スコアの変動を見ると、7月と11月の間で若干の平均値の低下が見られるが、統計的検定の結果、差は有意ではなかった。したがって、全体的に英語力が低下したとは言えず、ほぼ同程度と見るべきであろう。しかし、他の時期の変化と比べると明らかに傾向が異なることは事実である。これは、この時期は夏休みをはさむため十分な学習をしていないことが原因ではないかと考えられる。

そこで、リーディングとリスニングを個別に見てみることにした。リーディングの得点の変化は小さく、5月から7月へかけての差は有意であったが、その他は有意ではなかった。そのためリーディングにおいては、全体的に得点が増加したとは言えない。一方リスニングにおいては、7月と11月の間を除いて得点が増加し、いずれも差は有意であったことから、着実に得点が増加したと言える。それに呼応し、全体のスコアも増加し、最終的には平均で約50点の増加であり、本取組の成果があがったと言える。

2.2. 授業評価アンケートの分析

学生の授業に対する満足度について考察するために、前期末に行われた授業評価アンケートの結果を分析することとした。ここでは、本実践の対象となったコミュニケーションIBのクラス(3クラス、経済学部生)と、その他のコミュニケーションIBのクラス(45クラス)の平均を比較する。

このアンケートは教養教育科目全体で行っているもので、学期末に実施される。このアンケートには20項目あり、項目1から3は学生自身が授業に対してどのように取り組んだか問うもので、項目4から20は授業に対する評価に関するものである。ここでは学生の授業に対する満足度について考察することが目的であるので、項目4から20の結果について検討したい。項目は表3に示すとおりである。これらの項目に対し、4段階で答える(4:強くそう思う, 3:そう思う, 2:そう思わない, 1:全くそう思わない)。各項目における平均値は表3に示すとおりである。また図3は、平均値をプロットしたものである。

表3 授業評価アンケートの項目と平均値

質問項目		経済学部	その他
項目4	シラバス等で、授業の目的、内容、成績評価の基準は適切に示されて いましたか	3.45	3.15
項目5	授業の内容は、シラバスの内容と対応していましたか	3.42	3.17
項目6	授業内容の難易度は適切で、理解可能な範囲でしたか	3.58	3.18
項目7	あなたは、授業により知的な刺激を受け、さらに関連する分野を学ん でみたいと思いましたか	3.16	2.76
項目8	黒板、視聴覚・情報機器等を使用する授業の場合、使い方は効果的で したか	3.51	2.86
項目9	テキストやプリントなどの補助教材は、授業内容を理解するのに役立 ちましたか	3.48	3.07
項目10	ノートやメモは取りやすかったですか	3.21	2.71
項目11	教員の声、話し方は聞き取りやすかったですか	3.56	3.14
項目12	理解すべき重要な箇所が強調されるなど、授業の説明は分かりやすか ったですか	3.51	3.05
項目13	教員は、学生に授業への参加（質問、発言、自主学習など）を促し、 質問や討論に十分に対応していましたか	3.25	3.13
項目14	あなたにとって、授業の進度は適切なものでしたか	3.55	3.11
項目15	授業に対する教員の熱意を感じましたか	3.42	3.16
項目16	総合的に判断して、この授業に満足しましたか	3.48	3.01
項目17	小テストや提出課題、授業内での指名を通じ、学習したことのフィード バックや確認は多くなされていましたか	3.57	2.99
項目18	宿題や課題、予習などの量と内容は適切でしたか	3.47	3.02
項目19	教員は、授業が単調にならないよう、いろいろな工夫をしているよう に思いましたか	3.28	2.76
項目20	あなたはこの授業を受けて、語学力が向上したと思いますか	3.26	2.79

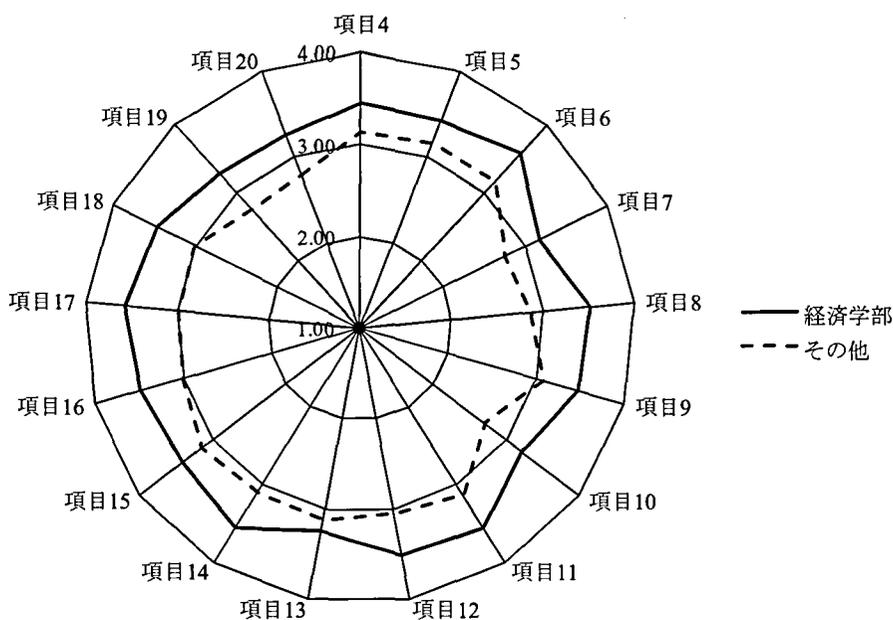


図3 項目ごとの平均値のプロット

表3および図3を見ると、本実践の対象となったクラスは他のクラスの平均を上回っており、評価が肯定的であることが分かる。また、すべて3（そう思う）を超えている。これらのことから、本取組に対する学生の評価は全体的に肯定的であり、満足度が高いと言える。

3 課題と今後の見通し

課題と今後の見通しとしては、以下の点が挙げられる。

「ぎゅっとe」消化率向上のための対策

「ぎゅっとe」は短期集中型で学習の絶対量を確保するWBT教材であるため、毎週割り当てられた課題の分量を消化できず、未消化の課題量に圧倒されて学習が中断する学生も見られた。今年度初めて「ぎゅっとe」を導入するにあたり、まずはその効果と学生の反応を確認することを重点に置いたため、来年度は、今年度の実績を踏まえ、「ぎゅっとe」による継続的な自学自習を支援するための具体策を考えていきたい。例えば、短期集中型英語学習の効果を事前に説明し、学習者が明確な目標を描きながら取り組めるようにすることや、未消化の学生に対し評価からの減点を行うだけでなく、順調に消化している学生を対象に、ボーナス点などのインセンティブを与えることなどが考えられる。

リーディング能力向上のための授業改善

これまで見てきたように、今年度の取り組みの結果、TOEIC IP テストの全体スコアは上昇し、授業評価アンケートに見る学生の反応も肯定的で、満足度が高かったといえる。一方で、TOEICの全体スコアとリスニングが通年で徐々に上昇しているのに対し、リーディングにはあまり変化

がなく、若干物足りない結果であった。このため来年度は、今年度の取り組みを継承しつつ、リーディング力の向上に重点を置きたい。具体的には、これまで利用してきた教科書や WBT その他の教材を一層活用しながら、直読直解により英文の情報を読み取る能力を向上させるため、授業内容の工夫と改善を図りたい。

参考文献

- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2006). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その1)」『広島外国語教育研究』 9, 115-125.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2007). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その2)」『広島外国語教育研究』 10, 85-95.
- 榎田一路・前田啓朗・磯田貴道・田頭憲二. (2008). 「広島大学キャンパス・ユビキタス・プロジェクトにかかる英語授業の実践 (その3)」『広島外国語教育研究』 11, 83-93.
- 前田啓朗. (2008). 「WBT を援用した授業で成功した学習者・成功しなかった学習者」 *Annual Review of English Language Education (ARELE) in Japan*. 19, 253-262.

ABSTRACT

Classroom Practice in English Classes Based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project: Report IV

Kazumichi ENOKIDA

Hiroaki MAEDA

Takamichi ISODA

Kenji TAGASHIRA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

This article provides an outline of the follow-up classroom practice in English classes based on the Hiroshima University Campus Ubiquitous Project. It presents the details of the teaching syllabus/procedures, teaching materials for WBT (Web-Based Training), and also a new evaluation system using TOEIC scores and students' evaluations for classroom practice. In this project, schedules are set up so that the same three teachers will take charge of the same English classes (Communication IB and Communication IIB) during the course of the whole year. The students are first-year students in the Department of Economics, and each class is conducted in the CALL (Computer Assisted Language Learning) classroom, as well as via an online network system. Based on the achievements and problems of the last few years' projects (see, Enokida, Maeda, Isoda, & Tagashira, 2006, 2007, 2008), some attempts are instigated to improve curriculum/lesson developments: using the same textbook during one year and WBT materials.